

グリーン経済シンポジウムin古河

「グリーン経済を成り立たせるための10の提言

パネルディスカッション」

事務局

去る2月4日（日）、茨城県古河市のスペースUにおいて、環境文明21、古河グリーン経済推進会議主催による、「グリーン経済シンポジウムin古河—持続可能な社会を支えるグリーン経済10の提言—」が開催された。

当日は、環境文明21グリーン経済部会がまとめた「グリーン経済を成り立たせるための10の提言（「食べる」、「働く」、「買う」、「支える」）を紹介した上で、森雅美氏（㈲森ファームサービス取締役社長）、中村康彦氏（㈱丘里代表取締役社長）、小山史子氏（古河市立三和東中学校PTA副会長）、恩田馨氏（古河市助役）に、当会の加藤三郎代表、藤村コノエ専務理事が加わり、パネルディスカッションが行われた。以下に、その概要を報告する。

森雅美氏（㈲森ファームサービス取締役社長）

㈲森ファームサービスでは「元気はおいしい」をテーマにしている。社員の14名、平均年齢31歳である。先日、「森ファームは6次産業だ」と言われた。その理由は、1、2、3次産業を掛け合わせたものとのこと。農業をやり、加工もやり、イベントなどのサービスもやっているの、その通りである。私の会社の商品は高いが、おかげさまで大半の商品は完売もしくはキャンセル待ちである。これは環境への取り組みの効果ではないだろうか。根本的な考えとして、「人優先の環境や生産性優先の食ではなく、自然優先の環境、安全性優先の食」を打ち出している。

中村康彦氏（㈱丘里代表取締役社長）

㈱丘里の経営理念は「喜び、幸せ、そして感動」である。食を通じてお客様に幸せを送りたい、そのためには、まずスタッフを幸せにしたいという思いである。スタッフは150名余おり、正社員、パート、アルバイトなど形態はさまざまである。8割以上が女性のスタッフであり、家族や子供を持っている。多様な働き方を認め、助け合っている。

環境への取り組みとしては、働き方の他に地産地消を取り入れ、安心・安全をうたいながら素材の味を生かしたメニュー作りを行っている。また

利益三分割という方針をとっており、出た利益のうち三分の一は働いているスタッフへ、もう三分の一はお客様や地域に還元している。

小山史子氏（古河市立三和東中学校PTA副会長）

最も関心があるのは地球温暖化とごみ問題。高校一年生の娘を持つ母親としては、子供が大人になったとき地球がどうなってしまうかということが心配の種である。

まずは家族と話し合いながら自分の家の環境について考え、それが地域へ、大きなつながりへと成長するといい。環境について考えることで、子供とコミュニケーションをとる機会が増え、食についても考えることが多くなり、さらに家計にもやさしいことがわかり、個人的に嬉しく思っている。

恩田馨氏（古河市助役）

古河市の環境施策として、①香りのまちづくり事業（ラベンダー祭りなど）②アダプトプログラム事業（緑化・清掃）③ISO14001関連④その他（各種清掃活動、イベントでのデポジット事業、エコスクール事業など）を行っている。また古河市は、環境に関心の深い自治体が集まる環境自治体会議に初期段階から参加している。1998年には環境自治体会議を古河で開催し、古河会議宣言を採択した。

<「食べる」の視点から>

森：環境・農業の問題は、農業者の価値観と同時に、消費者の価値観を変えることも非常に重要。消費者が持つ「お金＝価値」という価値観を変えることが必要ではないか。

小山：確かに消費者の中には冬でもトマトやキュウリを食べたいというニーズはある。しかし、自分は旬のものを食べるようにしている。ただし、女性としての働き方も考えないと手のかかった旬の料理を作ることは難しいと思う。

中村：とれたての食材のおいしさを伝えるため、なるべく旬の食材、地元の野菜を使うようにしている。

藤村：地産地消はいいことづくしということだが、学校給食などに取り入れることはできないのか？

恩田：給食センターでは地産地消を進めている。

森：学校給食などでは地産地消をもっと進めてほしい。

会場：子供と買い物に行ったとき外国産の野菜を買わないようにしていたら、子供自ら「野菜は日本産のものを買うべきだ」という意識を自然と持つようになった。

<「働く」の視点から>

中村：スタッフには、仕事は一人一人の夢実現のための手段であるという理念のもと仕事してもらっている。また、地域貢献として地域のボランティア活動の賛助会員になったり、出た利益を少しでも地域の人に還元したいという思いで仕事をしている。

藤村：公的な場での働き方をどう考えるか？

恩田：もっと市の職員が地域の活動に出て意見を持ち帰り、仕事に生かしていくべきである。例えばボランティア休暇の励行などをするべき。

小山：私の主人は平均片道2時間かけて東京に勤めている。子供のために働くはずが、仕事で忙しく子供にお金を与えるだけになり、コミュニケーション不足になったりする。それでは本末転倒である。

**<「買う」の視点から>**

小山：消費者としてはお財布の中身が気になるのは確か。しかし安すぎるものが多いのも問題があると考えている。安かろう悪かろうに納得するのではなく、自分で選び、きちんとしたものをきちんとした価格で買うことが重要である。

加藤：グリーン経済部会でも100円ショップ問題を議論したことがある。われわれは安いものには影があると考えている。

森：お米はスーパーでもコンビニでもドラッグストアでもあるが、わざわざ森ファームで高い米を買ってくれる人がいる。これには環境に対する会社の姿勢も関係していると思う。

小山：消費者としては安全という観点も重要。

藤村：古河のよさを生かしつつ古河を元気にしていくことが必要だが、古河の誇りとは何か？

中村：古河ほど農業商業工業の均整が取れた街はなかなか日本にはない。

小山：古河の子供たちはおおらかで人を思いやる気持ちが強いと思う。

加藤：古河の良いところは落ち着き、潤いなどである。

恩田：古河は伝統と文化が共存している。またふるさとの風景もある。

藤村：10の提言を古河版に書き直し、古河で実現して行ってほしい。古河で、世界に誇れる持続可能な街づくりができることを願っている。